

研究分野	資源管理	部名	資源管理部
研究課題名	多元的資源管理型漁業推進事業 日本海海域		
予算区分	漁業調整費 (国1/2)		
試験研究実施年度・研究期間	H.15 ~ H.19		
担当	伊藤 欣吾		
協力・分担関係	水産振興課、水産庁、(独)日本海区水産研究所		

〈目的〉

これまで資源管理を実施してきたヒラメ、マコガレイ、マガレイ、ムシガレイ、タイ（マダイとチダイ）、ハタハタの資源管理後の漁獲動向を把握する。

〈試験研究方法〉

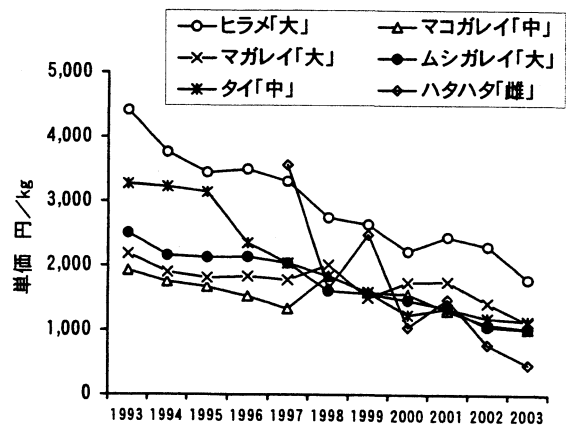
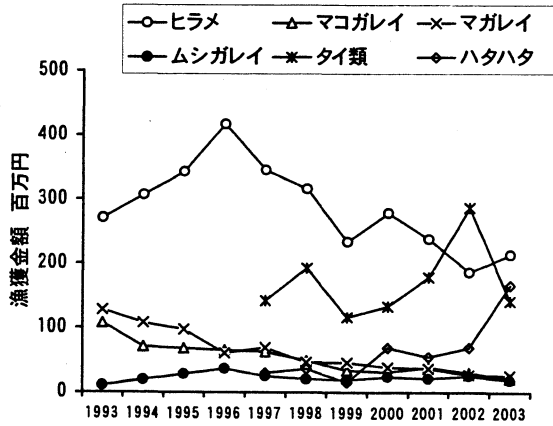
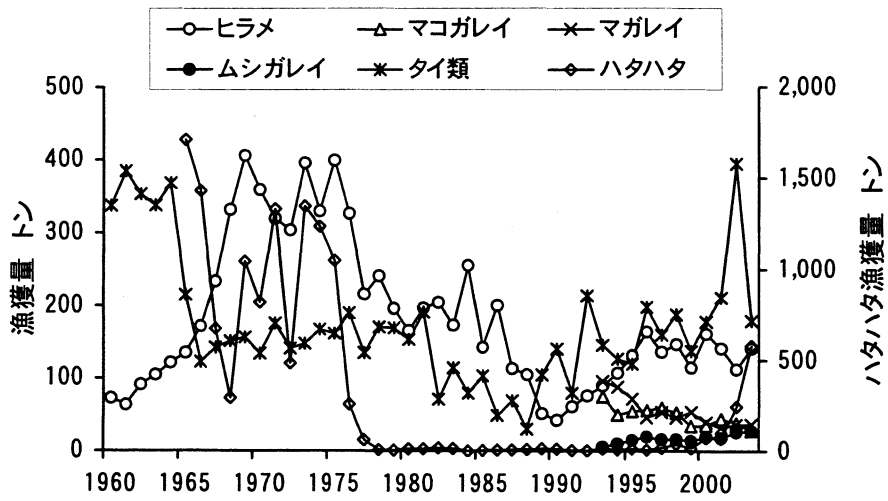
漁獲量と漁獲金額の解析には、県統計資料（青森県企画振興部発行の「青森県海面漁業に関する調査結果書」）と各漁協の集計表を用いた。なお、各漁協の集計表は日本海沿岸9漁業協同組合（小泊、下前、十三、鱒ヶ沢、大戸瀬、風合瀬、深浦、鱸作、岩崎村）を対象とし、1993年1月～2003年12月の期間である。十三漁協は2002年1月より鱒ヶ沢漁協への水揚げから独立し、脇元漁協は小泊漁協へ、車力漁協と赤石水産漁協は鱒ヶ沢漁協へ水揚げしている。これら9漁協の漁獲量は大間越漁協を除いて日本海全漁協を網羅している。魚体測定は、様々なカレイ類が混在する大戸瀬漁協の銘柄「小カレイ」の魚種組成を明らかにするため1～5月に実施し、ムシガレイについては4月の大戸瀬漁協を、ハタハタについては鱒ヶ沢漁協沖合底びき網と岩崎村漁協定置網を対象に実施した。漁獲物の全長組成を推定するため、これらの魚体測定データと、マガレイについては資源評価事業委託調査で実施した魚体測定データを用いて、ヒラメについては小田切（1987）の銘柄別全長組成などのデータを用いて解析した。

〈結果の概要・要約〉

最近の漁獲動向は、ハタハタが急増、ムシガレイが微増、ヒラメとタイが横ばい、マコガレイとマガレイが減少傾向となっている（図1）。漁獲金額（図2）は漁獲変動とほぼ同様に推移しているものの、単価（図3）の低下が激しく、漁獲量ほどの伸びは見られなかった。

漁獲物の全長組成と年齢組成については次のとおりである。ヒラメについては、全長組成を小田切（1987）の銘柄別全長組成データなどを用いて推定したが、全長別雌雄比に年変化がないものと仮定したところに問題があると思われ、また、年齢組成を相澤・滝口（1999）のMS-Excelのソルバー機能を用いたサイズ度数分布による年齢組成を推定する方法を用いて試算したが、小田切（1987）の結果と比較検討する必要がある。マコガレイについては測定データが不備のため全長組成の推定は困難である。マガレイについては2003年度から資源評価事業においてAge-length-keyの作成を開始したので、結果がほしい年齢組成を推定する。ムシガレイについては毎年4月の体長組成を推定しているが、雌の魚体測定データが少なく推定誤差が大きいので、測定個体数を増やす必要がある。ハタハタについては、2003年の体長組成は雄では150～180mmの個体が95%、雌では170～200mmの個体が88%を占めており、これらの個体は雌雄ともに2歳魚（2001年生まれ、約2歳10ヶ月）と考えられ、資源状態は2001年生まれの卓越年級群に支えられている現状にあると思われる。

〈主要成果の具体的なデータ〉



〈今後の問題点〉

資源解析をする上で、測定データが不足している。

〈次年度の具体的な計画〉

ヒラメ、マガレイ、ムシガレイ、ハタハタの魚体測定を実施し、全長組成と年齢組成の推定を行う。

〈結果の発表・活用状況等〉

青森県（2004）平成 15 年度多元的資源管理型漁業推進事業報告書。（印刷中）